

つりて總て四角につくる格子やうの物を組子といふ、その角々を切たるが切子なり、切は隅切角の切子、組子の子なりと解さば論なかるべし、昔よりきりこの字論あるを、其角うるさくや思ひけん、貞享元年自筆耕せる、蠹集には片假名にて書り、

〔和漢三才圖會三十二家飾具〕燈籠とうろう○中略

一種岐里古燈籠、聖靈祭等用之、所飾紙繪甚華美、

〔武江年表七〕此年間政○寛政記事

兒輩の翫ぶ切り組燈籠繪は、上方下りの物也、夫故始は京の生洲、大坂の天滿祭の圖杯を重板せり、寛政享和の頃、蕙齋政美多く畫き、又北齋も續ひて畫けり、文化にいたり、歌川國長豊久此伎に工風をこらし、數多く畫き出せり、其梓今にありて年々摺出せり、

〔嬉遊笑覽六下〕菓物の燈籠、廣東新語、廣州時序の條、八月十五之夕、兒童燃番塔燈、持袖火、踏歌於道、曰灑樂仔灑樂兒、無咋糜塔累碎瓦爲之、象花塔者其燈多、象光塔者其燈少、袖火者以紅袖皮彫鏤人物花草、中置一琉璃盞、朱光四射、與素馨茉莉燈交映、蓋素馨茉莉燈以香勝、袖燈以色勝、この方にて西瓜の肉を削り取て、中に火をともして青くみゆるも、おなじ類なり、

## 燈籠用法

〔雅亮裝束抄〕もやひさしのてうどたつる事

ひさしののきのとうろのつなひるはかへすべし、すそのわなをかみへひきかへして、むすびめよりかみにはさむべきなり、

五せち所のこと

とうろは帳の左右のまののきにつるべし、そばにもつるべきところあらば、いくつもつるべきなり、

〔日中行事〕ひるの事どもはてぬれば、所々の掌燈す、まづ仁壽殿の露だいのとうろ二、清涼殿のと